

3年生の志望校検討会の実施時期と内容

回	時期	目的・内容	参加者
	4月	入試総括会。前年度第6回の検討会の結果を基に、教師全員で前年度の入試結果を総括	全教師
第1回	5月下旬	新旧担任連絡会。新旧担任の質疑応答、各学年の指導方針の共有	全教師
第2回	7月上旬	校内実力テストと模試の結果を分析・共有。当該学年の裁量による自由な検討会（夏休みの課題設定、面談に向けての目線合わせなど）	全教師
第3回	10月下旬	校内実力テストと模試の結果を分析・共有。当該学年の裁量による自由な検討会（気になる生徒をピックアップしての志望校検討など）	全教師
第4回	12月上旬	校内実力テストと模試の結果を分析・共有。生徒が担任と共に作成した四つの出願パターンを基に、各クラス文系・理系各5人の志望校を検討	全教師
第5回	1月下旬	センター試験後、生徒が作成した四つの出願パターンを基に、2日間掛けて生徒全員の出願校を検討	全教師
第6回	3月下旬	入試総括会。入試結果を踏まえ、1年間の進路指導の反省と課題の分析を行い、次年度に向けた方針を共有	進路指導部

静岡県立富士高校

校内実力テストの分析で 生徒の伸びしろを見極め 指導の平準化を目指す

静岡県立富士高校は年6回の志望校検討会に、全校体制で取り組む。生徒と担任とで練る併願パターン、担任会での事前準備、生徒の伸びしろを見極めるための教科指導力の向上などにより志望校検討の精緻化を図る。

志望校検討会のポイント

- 教科指導力向上のために、検討会で校内実力テストの分析を必ず行う
- センター試験の得点に応じた出願先を4パターン、生徒と担任が話し合っって練り上げる
- 1学年約40人分（第5回は約320人分）の出願パターンを参加者全員で検討。客観的な判断を下すと共に、各教師がさまざまな生徒への指導ノウハウを蓄積する
- 司会の事前準備、週1回の担任会を十分にを行い、検討会を活性化させる

静岡県立富士高校

◎1923(大正12)年に静岡県立旧制中学校として開校。校訓は「克己心身を練れ」「勤勉実力を養え」「至誠事に当れ」。部活動も活発で、野球部は過去2回甲子園出場、百人一首部は全国大会10連覇を成し遂げた全国屈指の強豪として知られる。

設立 1923(大正12)年

形態 全日制・定時制／普通科・理数科／共学

生徒数(1学年) 約320人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大など243人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ545人が合格。

住所 〒416-0903 静岡県富士市松本17

電話 0545-61-0100

Web Site <http://www.shizuoka-c.ed.jp/fuji-h/>

3年生の検討会に 1・2年生の担任も参加

静岡県立富士高校の3年生の志望校検討会が現在の形で定着したのは15年ほど前。以降、3年間の進路指導の核として全校体制で取り組んできた。一人ひとりの入試結果は、生徒個人や担任、学年ではなく、学校全体の責任と捉えているからだ。



静岡県立富士高校
佐藤房生 Sato Fusao
教職歴26年。同校赴任歴12年目。進路指導主事。「考えることの面白さ、楽しさ、大切さを伝えていきたい」



静岡県立富士高校
望月伸浩 Mochizuki Nobuhiko
教職歴26年。同校赴任歴7年目。1年生主任。「素晴らしい生徒と共に日々過ごせることに感謝している」



静岡県立富士高校
和田里衣子 Wada Rieko
同校赴任歴6年目。2年生担任。「人生に高校時代をグラウンディングできる生徒を育てたい」



静岡県立富士高校
秋永能宏 Akinaga Yoshihiro
教職歴18年。同校赴任歴11年目。3年生担任。「生徒の卒業時に後悔しないことを常に意識し、行動したい」

「年6回ある検討会のほとんどに1・2年生の担任も参加しています。学校全体で生徒の状況を共有しようという意識が定着しているのが本校の強みです」と、進路課で2年生担任の和田里衣子先生は話す。

「学年を超えて教師全員で3年生の進路指導にかかわることにより、本校の進路指導の方針やノウハウを共有し、学年間での指導の違いをなくし、教師の指導力を平準化することを目指しています。それが、本校の志望校検討会の最大の意義です」生徒や保護者の持つ情報量の変化も、志望校検討会の重要性を高めている。今はインターネットなどにより、入試に関する情報を簡単に入手できるようになった。ところが、保護者は自分たちに都合の良い情報だけを信じ、教師の言葉に耳を傾けようとしなれないこともある。進路指導主事の佐藤房生先生は、そうした保護者に説得力を持った話をするためにも志望校検討会が必要だと話す。

「生徒に伝える方針は、教師全員で検討することによって、担任一個

人の見解ではなく学校全体の総意となります。経験の浅い教師でも自信を持って指導できるようになります」

生徒と担任が練った 出願先を客観的に判断する

志望校検討会は年6回行うが、最も鍵となるのは、センター試験の得点に応じた出願パターンを、参加した教師全員で議論する12月上旬の第4回検討会だ。手順を見ていこう。

まず、第4回検討会の前までに教師と生徒が話し合い、センター試験の得点に応じて国公立大の出願先を4パターン作成する（P.14図）。第1志望校をケースAとし、ケースBはケースAより20〜30点低い場合、ケースCはケースBより20〜30点低い場合、ケースDはケースCより20〜30点低い場合だ。私立大志望の生徒も、同じように4パターン作成する。3年生担任の秋永能宏先生はその意義を次のように述べる。

「センター試験で思うように得点できず、慌てて志望校を選び直したり、悲観して志望を大幅に下げたり

する生徒は少なくありません。たとえセンター試験に失敗しても、気持ちを切り替えて最後まで入試に向かえるよう、あらゆる事態を想定しておくことが大切です」

10月までに、まず生徒自身がシミュレーションして4パターンの出願校を所定の用紙に書き込み、それを見ながら担任と面談を重ねて11月までに完成させる。この過程は生徒が志望を明確にしたり視野を広げたりすることにも効果があると、1年生主任の望月伸浩先生は指摘する。

「大学について調べたり、担任と面談を重ねたりするうちに、自分にはこの分野しかない」と決意を新たにすることもあれば、理学部の化学科志望の生徒が工学部に視野を広げるようになることもあります。志望校を徹底的に考えさせることで、より自分の志望が明確になり、将来を具体的に描けるようになるのです」

そして、第4回の検討会では、各クラス5人の生徒の出願パターンを参加者全員で話し合う。

「学力に比べて志望が高い」「セン

は明確な目的の下に行われているが、検討会の進行に重要な役割を果たしているのは司会役となる教師である。司会は単なる議事の進行役ではなく、検討内容によって、この場合はどの教師にアドバイスをもらうのが適切か、このケースではどのようなデータが必要かということに瞬時に判断し、議事を滞りなく進める力が必要だ。そのため、司会は同校で3年生担任の経験のあるベテラン教師が担当することが多いという。

「司会を任された時には、全ての生徒のデータを確認し、志望校の妥当性を自分なりに見極めておくようにしています。気になる生徒については、事前に担任の意向を聞いておきます。限られた時間内で話し合いを進めるためには、事前準備が何よりも大切です」(秋永先生)

第4、5回の検討会では、1・2年生の教師が司会を担う。文理の2グループに分かれて検討会を開くため、3学年団も二分となる。3年生の教師が検討に集中できるようにす

るためであり、また、他学年の教師の方が客観性・公正性を保てるからだ。

「担任は時間をかけて生徒と話し合いを重ねてきているので、数値的に見ると合格が厳しくても『生徒がそこまで言うのなら』と考えてしまい、適切な判断が下せなくなる場合があります。情に流されず冷静な判断が出来るよう、他学年の視点が必要なのです」(和田先生)

検討会に際しては担任団での目線合わせも重要となるが、3年生の担任と学年主任に進路指導主事を加えて開く、週1回の担任会がその役割を果たす。例えば、第1回の検討会(新旧担任連絡会)は、新3学年団が旧学年団に質問を投げ掛ける形式で行われるが、質問の作成や返答は担任会で練られる。具体的には、①4月までに新担任団が旧担任団に質問を投げ掛ける、②旧担任団は検討会までに文書で回答、③新担任団は担任会で回答を精査し、更に踏み込んだ質問を検討会でぶつけるといふ。「前年度の入試で得たノウハウや

経験の共有も大切ですが、それ以上に重視するのは、学年運営に対する意識付けです。担任会で質問を考えたり、回答を共有したりすることで気持ちを引き締め、1年間の進路指導を考えるきっかけにしてほしいと考えています」(佐藤先生)

第4回検討会で出願パターンの検討対象となる各クラス5人の生徒も担任会で事前に選ぶ。まず担任が候補となる生徒を選び、同じような課題を持つ生徒が重ならないよう担任会で調整する。

1・2年生の検討会と3年生での指導を結び付ける

入試結果が出そろった3月には、第6回として1年間の進路指導を総括する。出願前に予想した合格者数と実際の数を比較し、出願は妥当だったか、なぜこの生徒は合格し、別の生徒は不合格となったのか、忌憚のない意見を述べ合う。以前は、担任の進路指導力が課題に挙げられることが多かったが、今は教科指導についての反省が中心だといふ。

「検討会がしつかり機能し、担任間の指導力の差がなくなってきたからだと思います」(佐藤先生)

今後の課題は、1・2年生の志望校検討会と3年生の志望校検討会をどのように連携させるかだ。1・2年生でも学年団で検討会を開き、生徒一人ひとりの週単位の学習時間や模試結果などのデータを学年団で共有している。どの教科が強いのか、伸びしろはあるのかといった生徒の情報をもとに3年生での指導に生かすと共に、生徒にもっと早く志望校を考えさせるなど、生徒も巻き込んだ形で生かしていく方法を考えていくといふ。

「生徒が中途半端な情報に流されず、自分の夢を保護者に語れるくらいに確固とした志望を持ち、自分で人生を進めていく覚悟を、なるべく早い時期に持たせることが出来れば、3年生の進路指導は効果的に進められるのではないかと期待しています。本校が更に伸びていくための鍵が、そこにあるのではないかと考えています」(和田先生)